

[外国語]

CLIL教材開発に関する教員の意識調査

茂木 淳子*

1. 研究の背景

(1) 教師の不安

新学習指導要領の実施が目前に迫っている。高学年では教科として週に2時間、中学年では年間35時間の外国語活動が始まり、トータルで600~700語もの単語を扱う。この英語教育の早期化に対し、毎日新聞の調査(2016)によれば、高学年の担任100人のうち、約半数の45人が教科化に反対している。「賛成」の29人、「どちらでもない」の26人を賛成・中立的回答とし、母比率不等で直接確率計算すると否定的な回答が有意に上回っている($p < .05$ ※分析は筆者)。この調査では、反対理由として教師の多忙化が挙げられていた。国語、社会科、算数、理科、音楽、図工、体育、家庭科、総合的な学習の時間、それに加えて道徳・英語は教科化になり、プログラミングも必修となる。学級事務、課外活動の指導、生徒指導、保護者の対応、特別な対応を必要とする児童への合理的配慮など、学校における働き方改革の必要性が叫ばれるほどである(文部科学省, 2018)。

小学校の教員の多くは英語を教えることに自信がない(チェン・村上, 2013)。小学校における外国語活動は、新学習指導要領においても従来通り「聞く」「話す」ことが重要視されているが、英語を使いこなしたいと思いつつ、満足するほどの英語力がないという不安が表れているからである。その不安を払しょくするために、研修は不可欠ではあるが、「英語教育推進リーダー」から研修を受けた「中核教員」を全小学校に配置する文科省の計画では十分と言えないと感じる教員は多い(毎日新聞, 2016)。なかでも、一番の問題・課題として挙げられているのが「指導内容・方法」である(日本英語検定協会・英語教育研究センター, 2012)。現状では、文科省から配布されたHi friends!を使用して指導することが多い。ICTの活用もなされて、これさえあれば、なんとか授業が成立する。しかしそれは、Hi friends!が気に入って、児童に最適の教材であると判断して扱っているのではなく、時間と自信のなさを埋めるための妥協案なのではないかと思われる。

(2) CLILの認知度

近年、CLIL(Content and Language Integrated Learning)が注目されつつある。英語関連の学会ではこの発表が増えてきているが、一般には注目が低く、学校現場においてこの実践を目にすることはほとんどない。

これまでの指導要領において、他教科との関連のある題材を取り扱うことは可能であった。小学校外国語活動研修ガイドブックでは、「小学校外国語活動の授業構築には、他教科等との関連を考慮した横断的カリキュラムをもとにするのがよいとされていた。これは、児童が既に持っている知識や体験、他教科等で学んだ知識や国際理解面の知識を題材として、より知的な内容や教材を準備することで、高学年の児童でも取り組みたいと思えるような活動が可能になるからである。」と述べられている。また、新学習指導要領においても、「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。」とある。これは、どのくらい具体化されているのであろうか。文部科学省の英語教育強化地域拠点事業の指定を受けている29の地区のうち、これに関連すると思われる内容の記載があるのは表1の5件のみである。決して多い数とは言えず、その実践のよさが全国に普及していくには、まだ時間がかかりそうである。

* 上越市立柿崎小学校

表1 CLIL的内容の記載とその英語教育強化地域

岩手県紫波町立日詰小学校 他2校	他教科との関連を活かした単元や、地域の題材を扱うオリジナル単元
山形県鶴岡市立朝暘第三小学校 他3校	・社会科や「総合的な学習の時間」等との教科横断的な授業展開の工夫 ・郷土学習（歴史、産業、観光など）教材の開発
埼玉県鴻巣市立屈巢小学校 他2校	「花と人形のまち 鴻巣」をテーマとした郷土に誇りを持ち発信できる教材の作成
島根県雲南市立吉田小学校 他1校	地域の伝統や文化、歴史と関連させて、地域の良さを発信する活動を取り入れるとともに、ALTによる教材化を図る
広島県東広島市立東西条小学校 他1校	児童が必要感を持って英語を学び、児童の興味や授業後の汎用性を意識して、他教科等との関連を図った自作教材を積極的に開発している

2. 研究の目的

本研究は他の教育課程を生かしたCLIL実践を紹介し、CLILに対する教員の意識を明らかにするものである。

3. 研究の方法

- (1) 実施時期：2017年8月
- (2) 参加者：小学校教諭21名
- (3) 測定方法：ARCS動機づけモデルに基づくアンケート（5段階評定尺度形式の4項目）・外国語活動及びCLIL実践についての意識調査（5段階評定尺度形式の9項目のアンケートと自由記述）
- (4) 分析方法：直接確率計算

4. 生活科と連携した小学2年生のCLIL実践（茂木・北條, 2017）と参加者への紹介

- (1) 参加者：2016年度小学2年2クラス・2017年度小学2年2クラス 計80名
- (2) 実施時期：1期2016年4月～2017年3月・2期2017年4月～7月
- (3) 内容：小学2年生の生活科におけるCLIL実践
- (4) 実践の様子

2年生の生活科年間指導計画を表2に示す。「そだてよう！」では、できるだけ自分の力で野菜を育てる活動を通して、野菜の生長を喜んだり、自分で育てた野菜を収穫して食べたりした。畑の先生や家族から育て方を教えてもらい、生長に合わせた世話は工夫があることに気付かせ、野菜栽培について学ぶ機会とした。「食べよう！」では、旬の野菜や地域の食材を使い、調理して食べた。地域の自然や身近な人々とかわり、作り方を教えてもらいながら調理した。仲間と活動することを通してよりよいかかわり方を学ぶ機会とした。「楽しもう！」では、「そだてよう！」「食べよう！」の活動に関連付けたり、季節ごとの行事などを取り上げたりしながら、みんなで楽しめるイベントを企画・運営した。

表2 2年生の生活科「そだてよう！食べよう！楽しもう！」年間指導計画

そだてよう！（32時間）	食べよう！（38時間）	楽しもう！（35時間）
◇春夏野菜を育てよう	◇春を味わおう	◇春を楽しもう
CLIL：「野菜博士になろう①～自分の野菜をALTに紹介しよう」		
◇秋冬野菜を育てよう	◇夏を味わおう	◇夏を楽しもう
	◇秋を味わおう	◇秋を楽しもう
CLIL：「野菜博士になろう②～What part do we eat?」		
	◇冬を味わおう	◇冬を楽しもう

表3 CLILの4つのC

Content	Communication	Cognition	Community / Culture
生活科：野菜博士になろう	自分たちで育てている野菜の言い方 tomato / cucumber / eggplant / green pepper / okra / water malon / corn / japanese radish / punpkin / sweet potato / potato / spinach / carrot / What part do we eat? / roots / stems / leaves / flowers / seeds / fruit	普段食べている野菜は、野菜の体のどの部分なのか？ 友だちと意見交流しながら考える。	①自分の好きな野菜のカードを集めるゲームをする。 ②自分の畑にALTを連れていき、どんな野菜を育てているのかを紹介する。

この3本柱の生活科と関連付けたCLILの4つのCを表3に示す。また、「野菜博士になろう①～自分の野菜をALTに紹介しよう」の指導案を表4に示す。ここでは、自分たちの畑で育てている野菜を英語で言う練習をした後、野菜クイズをした。毎日畑で生長を見守っているだけあって、野菜の花や苗、葉っぱを見ただけでどの野菜なのかを言い当てていた。その後、好きな野菜カードを集めるゲームを友だちや担任、ALTと楽しんだ。後日、学校の校庭にある自分の畑にALTと一緒にいき、自分の野菜やみんなで育てている野菜を紹介した。

表4 「野菜博士になろう①～自分の野菜をALTに紹介しよう」の指導案

	児童の活動	担任の役割	ALTの役割	準備物
2	・あいさつ	・あいさつ	・あいさつ	
12	○野菜を英語で言ってみよう	◆担任主導 ・畑で栽培している野菜を中心に、英語で言える野菜を挙げさせる ・ALTの発音を聞かせ、児童と一緒に発音する	・児童の発表を聞き、その野菜の英語を聞かせる	畑で栽培している野菜を中心とした野菜の写真・イラスト
10	○野菜クイズを見て、英語で答える	・野菜の苗や花、一部分を表示した野菜クイズを見せる ・ALTの発音を聞いて、児童と一緒に発音する	◆ALT主導 ・野菜クイズの司会・進行をする ・児童が正解したら、もう一度英語で発音を聞かせ、くり返して言わせる	ジャガイモ、トウモロコシの花・サツマイモの苗・足のような大根・人間のようなニンジン・人の顔のようなピーマン・ほうれん草の茎の切り口などの写真
5	○「好きな野菜集め」のやり方を知る	◆担任とALTのデモンストレーション ・相手を見つけ、じゃんけんする ・勝った人は、相手のカードを見て、ほしい野菜を1つ選び、英語で言う ・勝った人は、ほしい野菜をもらったら、お礼に自分の野菜を1つ、相手に渡す ・ありがとうを言って、また別の相手を探しに行く		デモンストレーション用の大きな野菜カード（1人5枚）
10	○好きな野菜を集めよう	◆担任主導 ・担任・ALTも野菜カードを持ち、参加する ・たくさんの児童が担任・ALTのところに集まることが予想される。時間短縮のため、担任・ALTの見せたカードを英語で言えたら、渡すこととする		児童用野菜カード（1人5枚） 担任・ALT用野菜カード（多数）
5	○好きな野菜をかごに入れよう	◆担任主導 ・集めた野菜カードをワークシートに貼らせる	・どんな野菜を集めたか、児童の様子を見て一人一人声をかける	野菜かごのワークシート
1	・あいさつ	・あいさつ	・あいさつ	

「野菜博士になろう②～What part do we eat?」の指導案を表5に示す。ここでは、野菜の体を根、茎、葉、花、実、種に分け、普段食べている野菜がどの部分に当たるのかを考えさせた。いくつかの例を示した後、6種類の野菜（サツマイモ、ジャガイモ、ブロッコリー、コーン、かぼちゃ、レタス）を分類するクイズをした。初めて学習する内容であったため、2年生には難易度が高かったが、興味をもって取り組み、「家の人にも教えてあげたい」という感想をも

つ児童が多かった。

表5 「野菜博士になろう②～What part do we eat?」の指導案

	児童の活動	担任の役割	ALTの役割	準備物
2	・あいさつ	・あいさつ	・あいさつ	
10	○ 野菜の体を知ろう	・ トマトの葉や茎、根などは食用でないことを確認する ・ ALTの発音を聞かせ、児童と一緒に発音する	◆ALT主導 ・ 野菜の体を根、茎、葉、花、実、種に分け、英語での言い方を紹介する	トマトの全体の様子（根、茎、葉、花、実）が分かるようなイラスト
15	○ 野菜のどの部分を食べているのかを考える	◆担任主導 ・ 葉っぱがおいしい野菜、茎がおいしい野菜、種がおいしい野菜などを考えさせる ・ 児童の発表を聞き、どの部分が食用なのかを確認する	・ 児童の発表を聞き、どの部分が食用なのかを英語で言う	いろいろな野菜のカード
10	○ 野菜クイズ	◆担任主導 ・ 友だちと相談しながら、かぼちゃ・じゃがいも・ブロッコリー・ほうれん草・コーン・さつまいもを根、茎、葉、花、実、種に分類させる	・ 野菜クイズを考えている児童の様子を見て、必要ならば英語でヒントを出す	野菜クイズのワークシート
7	○ 野菜クイズの答え合わせ	・ ALTの答えに合わせて板書する	◆ALT主導 ・ 野菜クイズの答えを英語で言う	野菜カードと野菜の体
1	・あいさつ	・あいさつ	・あいさつ	

(5) CLIL実践後の担任の感想

この生活科と連携した小学2年生のCLIL実践は、計画を筆者が立て、授業はそれぞれの学級担任とALTが行ったものである。授業後、CLILのあらましについて説明し、他の教科や領域でも学級担任自身で計画してできるかどうかを問うたが、「無理」との即答であった。しかし、その直後、「あ、でも、国語の『大きなかぶ』の単元でやったら楽しそうだね」「算数だったら、トピック的なところを英語でできたら楽しいね」「音楽なら…」と、アイデアが次から次へと湧いてきた。「無理」と即答したにもかかわらず、である。このことから、英語が専門でなくても、学級担任としての豊富な経験と知識を生かしたCLIL教材の開発が可能であることが伺えた。

(6) 参加者への紹介

市内小学校の英語中核教員21名に、上記の生活科と連携した小学2年生のCLIL実践を紹介した。また、CLILについて説明し、オリジナルのCLIL実践を計画、紹介する時間を設けたのち、アンケートを実施した。

5. 結果

(1) ARCS動機づけモデルに基づくアンケート

ARCS動機づけモデルに基づくアンケートの結果を表6に示す。各項目の平均は、3.76から4.29の範囲にあり、いずれの群においても好意的な反応が得られたと考えられる。「5.はい」「4.少しはい」と答えた参加者の数を「肯定的回答」とし、「3.どちらでもない」「2.少しいいえ」「1.いいえ」と答えた参加者の数を「中立・否定的回答」とした。各項目を2対3の母比率不等で直接確率計算をした。いずれの項目においても「肯定的回答」が「中立・否定的回答」を有意に上回っていた。

表6 ARCS動機づけモデルに基づくアンケートの結果 (N=21)

項目	M	SD	肯定的	中・否定	結果	p
1 Attention (注意)	4.29	0.64	19	2	肯定>中・否定	**
2 Relevance (関連性)	4.05	0.92	18	3	肯定>中・否定	*
3 Confidence (自信)	3.76	1.00	18	3	肯定>中・否定	*
4 Satisfaction (満足感)	4.24	0.70	18	3	肯定>中・否定	*

* p<.05 ** p<.01

(2) 外国語活動及びCLIL実践についての意識調査

外国語活動及びCLIL実践について教員の意識調査 (N=21名) の結果を表7に、自由記述を表8に示す。項目1, 2, 3においては「肯定的な回答」が「中立・否定的」な回答を有意に上回っており、項目4では、「中立・否定的な回答」が有意に上回った。このことから、市内小学校の英語中核教員の多くはHi friends!中心の授業をしており、外国語活動の指導は楽しいが、準備が大変であると感じていることが分かった。

CLILに関する項目については、項目5, 6, 7, 9においては「肯定的な回答」が「中立・否定的」な回答を有意に上回っており、項目8では、「中立・否定的な回答」が有意に上回った。このことから、CLILはHi friends!の授業と同様に準備がたいへんそうであるが、児童の興味となる内容となり得、やってみたい内容であるにとらえていると考えられる。また、CLILについて、初めて知ったと答える教員が多かったが、CLIL教材の開発は研究者よりも、児童をよく知る小学校教諭が開発すべきであるにとらえていることがうかがえる。

表7 CLILに関する教員の意識調査結果

項目	M	SD	肯定的	中・否定	結果	p
1 外国語活動の指導は楽しい	3.90	1.09	15	6	肯定>中・否	**
2 授業準備がたいへん	3.95	0.67	16	5	肯定>中・否	**
3 普段はHi friends!中心の授業である	3.86	1.53	13	8	肯定>中・否	*
4 普段は独自の内容・カリキュラム	2.71	1.45	8	13	肯<中・否定	*
5 CLILをやってみよう	4.00	0.63	17	4	肯定>中・否	**
6 CLILは児童の興味ある内容となり得る	3.86	0.73	14	7	肯定>中・否	*
7 CLILの準備がたいへんそう	4.57	0.51	21	0	肯定>中・否	**
8 CLILは研究者が開発すべき	3.14	1.28	7	14	肯<中・否定	*
9 CLILは小学校教諭が開発すべき	4.14	0.91	19	2	肯定>中・否	**

* p<.05 ** p<.01

表8 CLILに関する自由記述

- ・授業で取り入れてみたい
- ・特別支援学級の子どもにも活かしていきたい
- ・総合で取り入れていきたい
- ・CLILについて全く知らなかった内容だったので勉強になった
- ・CLILという新しい方法を知った
- ・他教科と英語を組み合わせたCLILという学習のアイデアを学べた
- ・CLILという方法を新しく知った。時数増への対応策になるのではないか
- ・他の先生が考えたCLILを紹介してもらったので、新しい見方が増えた
- ・CLILは難しそうだが、子どもが必要感に迫られる場面を見つけてやってみよう

6. 考察

本研究では、非常に興味深い結果が得られた。それは、表6に示した項目8と9である。「CLILは研究者よりも小学校教諭が開発すべきである」という結果である。このアンケートの参加者は小学校の英語中核教員ではあるが、普段の授業はHi friends!中心であり、オリジナルの単元開発に前向きであるとは言い難い。それでもなお、「研究者よりも小学校教諭の方が」と答えるのは、注目すべき点である。

CLIL Japan Primaryのホームページでは、次のように表記されている。

「理科・社会などの単一教科内容・もしくはテーマ・トピックに沿った教科横断型内容を取り入れることにより、小学校の先生方の知識や経験を活かしながら小学校学習指導要領にある『他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫』を取り入れた実践指導を行うことができるようになります。」

これは、小学校教諭がCLIL教材の開発に向いていることを示しているように思われる。英語には自信がない。どのような内容で、どうやって教えたらいいいかわからない。しかし、これまで培ってきた他の教科・領域であれば自信をもって取り組むことができる。児童の実態や地域の素材に合わせてアレンジしていくことは、小学校教諭の得意分野である。この結果は、山野（2013）と一致している。山野はCLILの4原理を取り入れた指導案作成が教員の負担になることが課題であるとしている。筆者の経験をもとにすれば、「たいへん」には2種類ある。「たいへんだけど、子どものためになると思うからやりがいがある」のか、「たいへんで、かつ、価値がないからやりたくない」である。本アンケートに答えた英語中核教員は、そのたいへんさが前者であると感じたからこそ、小学校教諭がCLIL教材を開発すべきであると回答したと推察される。

7. 今後の課題

本研究では、英語中核教員にとってCLILは魅力的であり、自ら開発してみたいと感じていることが明らかになった。今後は、英語を専門としない他の教員がCLILをどのように受け止めるかという意識調査が必要である。また、学級担任が開発するCLIL教材と実践の記録を集め、その効果について検証する必要がある。

引用文献：

- 山野有紀. (2013). 「小学校外国語活動における内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と可能性」. 『EIKEN BULIETIN』. 25, 94-126.
- 岩手県教育委員会. (2016). 「平成27年度 英語教育強化地域拠点事業 事業経過報告書」. H29.10.2検索.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2016/03/29/1368880_02.pdf
- CLIL Japan Primary. H29.10.2検索 <http://primary.ciljapan.org/what-is-clil/>
- 埼玉県教育委員会. (2016). 「平成27年度 英語教育強化地域拠点事業 事業経過報告書」. H29.10.2検索.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2016/03/29/1368880_06.pdf
- 島根県教育委員会. (2016). 「平成27年度 英語教育強化地域拠点事業 事業経過報告書」. H29.10.2検索.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2016/03/29/1368880_18.pdf
- チェン敦子・村上加代子. (2013). 「小学校英語活動における教員の意識調査」. 『神戸山手短期大学紀要』. 56, 45-50.
- 日本英語検定協会・英語教育研究センター. (2012). 『小学校の外国語活動に関する現状調査 (小学校対象) 調査結果報告』. H29.10.2検索. <http://www.eiken.or.jp/news/kyoukai/120518r01.html>
- 広島県教育委員会. (2016). 「平成27年度 英語教育強化地域拠点事業 事業経過報告書」. H29.10.2検索.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2016/03/29/1368880_19.pdf
- 毎日新聞. (2016). H29.10.2. 検索. <https://mainichi.jp/articles/20160918/k00/00m/040/057000c>
- 茂木淳子・北條礼子. (2017). 「他教科の教育課程を生かしたCLIL実践の効果」. 『第17回小学校英語教育学会 兵庫大会要綱集』. 85.
- 文部科学省. (2008). 『小学校外国語活動研修ガイドブック』.
- _____. (2018). 「学校における働き方改革に係る緊急提言」. H30.1.11 検索.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/_icsFiles/afiedfile/2017/09/04/1395249_1.pdf
- 山形県教育委員会. (2016). 「平成27年度 英語教育強化地域拠点事業 事業経過報告書」. H29.10.2検索.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2016/03/29/1368880_04.pdf